**Plenary Lecture 2**

## English Language Education in Japan: Challenges and Future Directions
## 日本の英語教育における指導と評価：課題と今後の方向性

Baba, Tetsuo (Tokyo Gakugei U.)

本講演では，戦後の学習指導要領と評価システムの歴史的変遷を踏まえた上で，現行制度の特質と課題を整理し，次世代の指導及び評価の在り方への示唆を提示する。

戦後日本の学校教育における英語指導は，小・中・高等学校の学習指導要領が改訂されるたびに大きな影響を受けてきた。また，学習指導要領改訂に伴う評価システムの改革及び指導要録の改訂によって，学習評価の方法も変遷を遂げてきた。

日本の英語教育界は，第二言語習得研究や外国語教育研究の成果を取り入れていくという地道な営みを続ける一方で，学習指導要領や評価システムが改訂されるたびに，対症療法的な現場対応を強いられてきた。そして，学習指導要領に基づく指導を受けた学習者たちを大学で受け入れて指導することとなるので，大学でも小・中・高等学校の教育の内容と方法の変化と連動した現場対応を求められることになる。外国語（英語）においては，2020 年度時点の小学校３年生が現行学習指導要領に基づく学びの起点となるので，その生徒たちが現役で大学に入学するのは 2030 年度である。

こうしたナショナル・カリキュラムの改訂に伴う事後的対応は必須であるが，それにとどまらず，ナショナル・カリキュラム自体の適切さ・妥当性を検討・検証し，問題点を洗い出し，解決策を示すことも大学人の重要なミッションであろう。本講演では，現行制度の課題を洗い出し，次世代のナショナル・カリキュラムの構築に向けての検討を行う。

東京学芸大学教職大学院教授。中・高の英語教育（特に文法指導と評価）を主たる領域とし，中学校英語検定教科書の執筆・編集に 30 年以上携わってきた。官民のテスト開発にも取り組んだ。また，英語教員養成コア・カリキュラムの作成において，中等教育部門の統括を務めた。2023 年度より附属竹早中学校長を併任している。